

伊坂幸太郎。我が家の長男の口からよく出ていた作家の名前である。私は、その作品を読んだことはない。だが、なぜだかその名前は知っている。著名な作家の一人ということだろう。

そういえば、ここのところ小説というものを読まなくなった。自然とそうなった。きっと他の類の書物を読んでいるからである。小説は読まなくても生きていける。読まなくても困らない。そういった存在である。とはいえ、読めば人生が豊かになる。読めばおもしろく、考えさせられるのも事実である。

伊坂幸太郎氏のことは気にはなっていた。それはなぜか。仙台市在住だからである。作品の中には、仙台のことがよく出てくると息子が言っていた。たまたま、伊坂幸太郎氏のインタビュー記事を読む機会があった。それで、ようやく伊坂さんのことを知ることができた。

伊坂さんは、書いていてしんどくなることが結構あるという。「伊坂幸太郎だったら、こんな作品だろう」と思う人がいるはずで、そのイメージと違うものを書いたら、読者はがっかりするかなあ、と考えてしまうそうである。

レベルはだいぶ違うが、文章を書く者として、伊坂さんが言っていることがわかるような気がする。校長室だよりや園長通信、福島民友新聞「随想」を読んでもくださった方から感想やコメントをいただくことがある。お話を聞いていると、その方の好みというものがわかる。すると、その方の期待に応えようとしてしまうことがある。

ところが、途端に書けなくなる。うまく書こうとすると、どうも筆が進まない。ここらへんが素人の悲しさである。そうこうするうちに、自然体へと戻っていく。そうしないと続かない。自分でも何を書くのかわからない。ふと思いつく。急に文章が湧いてくる。それを待っているようなところがある。

伊坂さんには、書けなくなった時期が二度ほどあった。プロでもそうなのか。これまたレベルが段違い平行棒なのだが、自分にも書けなくなるというか、文章が出てこなくなることがある。まあ、いいかと自分をほったらかしにしていると、そのうち復活してくる。切れたバッテリーが充電されるのだろうか。

伊坂さんは、原稿に取りかかる前にコーヒーを淹れる。コーヒーメーカーのセットをする一連の動作をしながら香りを楽しむうちに、仕事のスイッチが入るそうである。これもレベルがかなり違うとは思いますが、コーヒーが傍らにあったほうが、筆の進み具合が違う。明らかに冴えてくる。そういう気がする。まずは、手始めに『重力ピエロ』でも読んでみようか。